武蔵野日曜聖書講筵
罪びとの首の面目
――テモテ前書第１章――

１９９２年７月５日
小池辰雄

牧会書簡　信実の子テモテ　目的は信仰より出づる愛　キリストの中における信交　罪びとの首　永遠の生命の中へと入る者のサンプル

【テモテ前1】

1 **我らの救主なる神と我らの希望なるキリスト・イエスとの命によりてキリスト・イエスとの使徒となれるパウロ、2書を信仰に由りて我が真実の子たるテモテに贈る。願わくは父なる神および我らの主キリスト・イエスより賜う恩恵と憐憫と平安と、汝に在らんことを。**

3 **我マケドニヤに往きしとき汝に勧めし如く、汝なおエペソに留まり、或る人々に命じて異なる教えを伝うることなく、4昔話と窮りなき系図とに心を寄する事なからしめよ。此等のことは信仰に基ける神の経綸の助けとならず、反って議論を生ずるなり。5命令の目的は、清き心と善き良心と偽りなき信仰とより出づる愛にあり。6或る人々これらの事より外れて虚しき物語にうつつり、7律法の教師たらんと欲して、反って其の言う所その確証する所を自ら悟らず。8律法は道理に循いて之を用いば善き者なるを我らは知る。9律法を用うる者は律法の、正しき人の為にあらずして、不法のもの、服従せぬもの、敬虔ならぬもの、罪あるもの、潔からぬもの、妄なるもの、父を撃つもの、母を撃つもの、人を殺す者、10淫行のもの、男色を行うもの、人を誘拐すもの、偽る者、いつわり誓う者の為、そのほか健全なる教えに逆う凡ての事のために設けられたるを知るべし。11これは我に委ね給いし幸福なる神の栄光の福音に循えるなり。**

12 **我に能力を賜う我らの主キリスト・イエスに感謝す。13われさきには瀆す者、迫害する者、暴行の者なりしに、我を忠実なる者として、この職に任じ給いたればなり。われ信ぜぬ時に知らずして行いし故に憐憫を蒙れり。14而して我らの主の恩恵は、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るるばかりいや増せり。15『キリスト・イエス罪人を救わん為に世に来り給えり』とは、信ずべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首なり。**

16 然るにわが憐憫(あわれみ)を蒙(こうむ)りしは、キリスト・イエス我を首(かしら)に寛容をことごとく顕し、この後、かれを信じて永遠の生命を受けんとする者の模範となし給わん為なり。17 願くは万世(ばんせい)の王、すなわち朽ちず見えざる唯一の神に、世々限りなく尊貴(とうとき)と栄光あらん事を、アァメン。

18 わが子テモテよ、汝を指したる凡ての預言に循いて我この命令を汝に委ぬ。これ汝がその預言により信仰と善き良心とを保ちて、善き戦闘(たたかい)を戦わん為なり。19 或人よき良心を棄てて信仰の破船をなせり。20 その中にヒメナオとアレキサンデルとあり、彼らに瀆(けが)すまじきことを学ばせんとて我これをサタンに付(わた)せり。

●牧会書簡

パウロの書簡で一番早いのはテサロニケ前後書なんですけれども、テモテ前後書とあとテトス書というのと合わせて牧会書簡といわれる。しかし、

「これはパウロが書いたのではない」

と、ドイツの学者はすぐそんなことを言いだす。

「文体の上からも、時代の上からも、どうも、そうでない」

というようなことを、かなり言う人がいますけれども、私はこの内容を読んで、パウロでなければこれは書けないと思う。決して、他の弟子が想像で書けるような文章ではないですから。パウロは晩年で、相手が一人だから、文体を変えるということは、もちろんあり得るので、私ははっきり、パウロが書いたものと思っています。

伝説では、

「パウロは一遍、ちょっと釈放されて他を伝道して、また帰ってきて、それから書いたんだろう」

なんて言いますけれども。その伝説で、もしイスパニヤまで行ったら、この手紙の中に何かそれが出てくるわけです。ですから、

「パウロが一遍釈放されてスペインまで行った」

というのは正に伝説であって、史実ではないと私は思います。

テモテ前書は、テサロニケ前後書よりもむしろ後に書いたかも知れません。特に、

「自分はもう終りだ」

ということを彼は書いていますから。多分、紀元65～66年頃のものでないかと思われます。

テモテというのは、小アジア半島のルカオニア地方のルステラの出身です。お父さんはギリシア人で、お母さんはユダヤ系の人です。だから、ギリシアとユダヤの合の子みたいなのが、このテモテです。お母さんは、やっぱりユダヤ教で相当、信仰の深い人だったらしい。もちろん、パウロの第1回、第2回、第3回の、この三つの伝道に彼は同伴してい

ますから、テモテは非常に大事な弟子であった。

エペソ教会は大事な教会で、後でヨハネがいた所ですけれども、そこで少し止まって牧会していた。それで、この手紙を書いたということらしい。

●信実の子テモテ

1我らの救主なる神と我らの希望（のぞみ）なるキリスト・イエスとの命（めい）によりてキリスト・イエスとの使徒となれるパウロ、2書を信仰に出りて我が真実の子たるテモテに贈る。

「真実の子なる」というのはもちろん血筋の上でなくて、いわゆる血筋の人よりも肉の関係よりも、信仰上の、霊の関係の方が深いという意味で、真実の子なるという言い方をしている。弟子といわないで、子と言っている。ギリシア語を直訳すると、

「テクノー　エン　ピステイ」

「信仰の中における子」

ということになる。「真実（まこと）」という字は「信仰」という字と同じ字なんです。

だから、信仰という言葉はギリシア語でもヘブライ語でも、決して信じ仰ぐのではない。「信実」なんだ。この「しんじつ」の「しん」は「信」という字を書く。信実でなければダメだ。

「信実の子」

ということです。「希望なる」というのは、キリストの再臨のことを言っているんでしょうね。キリストは、

「もうすぐ来る。その時は分からないけれども」

ということを言っておられたから。

願わくは父なる神および我らの主キリスト・イエスより賜う恩恵と憐憫と平安と、汝に在らんことを。

「汝に在らんことを」と書いてある。普通なら、「汝らに」だけれども、ここでは相手は一人ですから。こういう出だしは、大体において、パウロの手紙の共通な出だしです。

3我マケドニヤに往きしとき汝に勧めし如く、汝なおエペソに留り、或る人々に命じて異なる教を伝うることなく、4昔話と窮（きわま）りなき系図とに心を寄する事なからしめよ。此等のことは信仰に基ける神の経綸（けいりん）の助とならず、反って議論を生ずるなり。

「昔話」と、面白い言い方をしていますが、神話的な物語のことをいうわけでしょう。「窮まりなき系図」は、いわゆる年代的な事をただ思ったってダメだというわけです。信仰の世界は神直結の世界ですから、

「こういう系統だ」

と言って、

「血筋をえらく言ってもダメだ」

と。パウロは系譜からいえば、素晴らしい系譜をもっている人ですけれども、そんなことをパウロ自身は問題にしているわけでない。或る所でちょっと言っていますが、それは

「もし言うならば…」

と言って、それで言ってるんですから。そんなものは枝葉の事だと。

●目的は信仰より出づる愛

5 **命令の目的は、清き心と善き良心と偽りなき信仰とより出づる愛にあり。**

「清き心」とは邪悪の気持のない心です。「善き良心」という言葉が、日本語で良心というけれども、原語では「意識」という字で、「善き意識」ということだから、「善き」は要らない。ただ「良心」で結構なんだ、もし日本語で言うならば。「善き良心」という訳し方はちょっとおかしい。善意識だ。

カントは、

「善き意志」

という言い方をする。それは平ったい言葉でいうと、「良心」のことになる。

「偽りなき信仰」

これは結構なことです。

「見かけ倒しの信仰ではダメだ。偽善的な信仰ではダメだ」

と。最後は、問題は愛なんだ。愛と言っても、いろんな愛がある。

「清き心と良心と偽りなき信仰から出ている、そういう愛でなくては」

ということです。

6 **或る人々これらの事より外れて虚しき物語にうつり、7 律法の教師たらんと欲して、反って其の言う所その確証する所を自ら悟らず。**

「虚しき物語」の、物語という言い方がおかしい。これは、我々が普通使っている物語と違う。非常に虚しいおしゃべり多弁なことです。

「虚しい多弁」

ということ。物語という訳はちょっとうまくない。

「分析的によく何だかんだとよく多弁を弄するが、そんな必要はない」

ということです。

8 **律法は道理（ことわり）に循（したが）いて之を用いば善き者なるを我らは知る。**

「律法は本来、聖なるもの」

とまで言っている。けれども、律法の根本精神はキリストがつかんでいたので、普通はそれをつかみ損なっているわけです。それで、キリストは律法の根本精神を掴んでいるから、表向きは律法を破るような事をキリストはする。だから、誤解されてしまう。

9 **律法を用うる者は律法の、正しき人の為にあらずして、不法のもの、服従せぬもの、敬虔ならぬもの、罪あるもの、潔からぬもの、妄(みだり)なるもの、父を撃つもの、母を撃つもの、人を殺す者、**

今の間違った世界のようなことを、初めっからもうこの頃から言っている。

10 **淫行のもの、男色を行うもの、人を誘拐(かどわか)すもの、偽る者、いつわり誓う者の為、そのほか健全なる教に逆う凡ての事のために設けられたるを知るべし。**

悪いものがみんな上がっている。

「律法の、正しき人の為にあらずして」

という言い方は、ヤコブ書に「新しき律法」と言ってますが、キリストの律法は霊法ですから、むしろ

「霊法の、正しき人の為にあらずして」

と言った方が、はっきりする位です。ロマ書8章に出てくる、霊の律法です。

11 **これは我に委ね給いし幸福(さいわい)なる神の栄光の福音に循(したが)えるなり。**

そうですね。だから、はっきりここで言っているわけだ。正しいというのは、

「我に委ね給いし幸福なる神の栄光の福音に循う」

ものが正しき律法という、パウロはその気持で言ったんでしょう。

●キリストの中における信交

12 **我に能力(ちから)を賜う我らの主キリスト・イエスに感謝す。**13 **われさきには瀆(けが)す者、迫害する者、暴行の者なりしに、我を忠実なる者として、この職(つとめ)に任じ給いたればなり。われ信ぜぬ時に知らずして行いし故に憐憫(あわれみ)を蒙(こうむ)れり。**

「自分はこの福音を瀆していた、逆らっていた、迫害する者であった」

と。

「何ぞ我を迫害するか」

と、キリストにやられたでしょ。「この職」とは「使徒の職」です。キリストの徹底的な憐憫(あわれみ)を蒙(こうむ)って、ひっくり返された。キリストの憐憫の最初の行為は、ダマスコ途上でひっくり返したことです。

14 **而して我らの主の恩恵(めぐみ)は、キリスト・イエスに由れる信仰および愛とともに溢るるばかりいや増せり。**

「キリスト・イエスに由れる信仰」

ではない。

「キリスト・イエスの中にあっての信仰」

という言い方です。

「キリスト・イエスの中における」

という、やっぱり、

「エン・クリスト」

と書いてある。だから私は、信仰は「信交」、信じ交わると書く。信じ交わる世界です。

非常に、パウロはキリストの恵み、力、愛、光に溢れていましたから、こんな言葉はパウロでなければ言えない言葉です。

「パウロが書いたのではない」

なんて、なぜ言えるかというくらなもんです。もうはっきり、パウロの言葉です。

とにかく、彼はユダヤ教に対しては、もの凄い熱心だった。熱心の内容が違ってきたんです。ユダヤ教に火のごとき熱心だった。だから、クリスチャンを迫害していた。今度は、神から、キリストからいただいた熱心に変わるわけです。自分の熱心ではない。ユダヤ教に対する熱心は、まだ自分の熱心だけれども。

「エホバの熱心、これをなす」

と、イザヤ書に出ていますが、イザヤのようなエホバの熱心ならいい。キリストの熱心です。キリストの熱心が入ってくる。熱心という言葉は、別な言葉でいうと、妬みの愛という。妬みという字を使っているところがある。「ジェラシー」というのは嫌な言葉ですけれども、

「神さまはサタンに人が囚われることを妬み争う」

という意味で、あの「妬み」という字は使うんだけれども、人間の普通の妬みとは違う。妬みというのはあまりいい概念ではない。キリストの熱心に切り替わった。

●罪びとの首

15『**キリスト・イエス罪人（つみびと）を救わん為に世に来り給えり**』**とは、信ずべく正しく受くべき言なり、其の罪人の中にて我は首（かしら）なり。**

キリスト自身の御言の中にある。

「我は罪びとを招かんために来た。義（ただ）しい人は関係ないんだ」

と。義しい人なんて本当は居やしないんだけれども。キリストはそう言われた。

「其の罪人の中にて我は首なり」

と。これが、

「罪びとの首（かしら）」

ということ。キリストに逆らって福音を受けとらない、そういう、

「神・キリストを受けとらないのを罪びと」

というわけだ。罪びとというのは、もちろん、なにか罪人（ざいにん）という意味ではない。

「万人はこれ罪びとなり」

というのは、生まれつきは本当に神を信じ受けとることがどうもできない。あるところまでは、感覚があっても、本当には受けとれない。福音には躓く。福音を受けとっても、なお、

相対的、存在的にはダメなわけだ。要するに、

「人間はみな同じことで、ダメだ」

と、こういうわけだ。

だから、日本の民主主義はいつまでたってもダメなんだ、民主主義だけでは。主義という言葉は嫌いだけれども、神本主義、神を本（もと）とすること。仏教の世界ならば如来を本としなければダメです。

「其の罪人の中にて我は首なり」

というのは、

「その罪びとの中で自分は第一のものだ」

という意味です。「プロトス」と書いてある。「ザ　ファースト」「かしら」という意味です。一番の罪びとなんだ、最低だと。

けれども、本当に罪びとの首になったのはキリストなんです、十字架で。罪びとの首の姿がこの十字架で処刑された姿です。十字架というのは本当はとんでもない徴なんだ。罪びとの首の徴だ。極刑だからね。極刑をあえて受けとった。

「こんなものは実は私は嫌です。いきなり天界にいきたいんです」

「だけれども、お前は、人々の罪を全部、背負え。罪びとの首になれ」

と。

「十字架は、わが我執というものを、我執の我というものを全部、贖いとってくださった」

というのが、十字架を受けとる本当の内容です。これは、誰でもが無条件に受けとれる世界です。条件はひとつも要らん。だから、これを本当に受けとれば、俄然、聖霊は来る。だから、独りで本当に十字架の中に祈り入り、瞑想し、祈りいる。集団ではない、独りです。独りでこの中に入っていく。

「いやぁ、本当にありがとうございます」

と。

「汝の罪、赦されたり」

と。シュタウピッツがマルチン・ルターに、

「わが罪、赦されたりと、そこまでこなければダメだ」

と言った。ルターはそれを受けとってひっくり返った。それで、宗教改革が始まったわけだ。ルターは聖霊の人になった。だから、ルターの聖書はそこで翻訳されたから素晴らしい。いわゆる学問的に正しい訳があっても、ルターの訳にはかなわないということは、そういうことです。

聖書の中には、特に旧約は、随分間違った現実があります、表現もあります。旧約は新約の光で読まないと、躓く。だから、まず新約を読まなくては。新約聖書というのは本当

に無駄がない。大変なもんだ、この新約聖書というのは。みんな聖霊の導きで書かれているから。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、使徒行伝、パウロの書簡、ペテロ、ヤコブ。この新約聖書というものは驚くべきものだ。万巻の書ありといえども、新約聖書にかなうものは一つもない。しみじみ思う。

罪びとの首の面目躍如たるものが、このパウロの告白で分かる。この14節から16節までの数節で。

●永遠の生命の中へと入る者のサンプル

16 **然るにわが憐憫を蒙りしは、キリスト・イエス我を首に寛容をことごとく顕し、この後、かれを信じて永遠の生命を受けんとする者の模範となし給わん為なり。**

「寛容」というのは要するに十字架の上でもって、

「彼らを赦し給え」

という、寛容どころのさわぎでない本当の赦しです。

「永遠の生命を受けんとする者」

とは

「永遠の生命の中へと入る者」

ということです。

「私をそのサンプルにするためだ」

と。

17 **願くは万世（ばんせい）の王、すなわち朽ちず見えざる唯一の神に、世々限りなく尊貴（とうとき）と栄光あらん事を、アァメン。**

面白い言い方をしているね、「万世の王」なんて。神さまに一切を帰する。そのとおりです。

18 **わが子テモテよ、汝を指したる凡ての預言に循いて我この命令を汝に委ぬ。これ汝がその預言により信仰と善き良心とを保ちて、善き戦闘（たたかい）を戦わん為なり。**

「わが子テモテよ」の「わが」という字はない。「子テモテよ」と言ってるだけです。

「善き戦闘を戦う」

という、パウロのこの表現は有名な表現です。「戦い」という「ストラテギー」「戦術」というドイツ語も英語もあるけれども、あれは元々ギリシア語です。「ストラティアン」という。

19 **或人よき良心を棄てて信仰の破船をなせり。**

「良心を棄てて信仰の破船をした」

と、面白い言い方をしている。パウロという人は非常に、いい意味における、良識的な言い方をする。

「人間が良心を失ったらダメだ。善き意識がないと、信仰なんていったって、これが気違い沙汰になったら、とんでもない」

と。それから、偽りの信仰にひっかかったら、とんでもないことになる。

私は、自分が立派だとか立派でないとか、そんなことは問題にしてない。キリストだけを問題にしている。その代わり、キリストに在るこの十字架・聖霊の根源現実をいただいている者は、世界中を相手にしても戦いますから、絶対に。パウロが言っている通り、善き戦いを戦います。

20その中にヒメナオとアレキサンデルとあり、彼らに濆(けが)すまじきことを学ばせんとて我これをサタンに付(わた)せり。

「勝手にしろ」

と。サタンに渡して、それで、間違ったことが分かったら、と。高慢で去って、そして、言う事をきかないのは、放っておいた方がいい。そして、どこかへ行って、本当に行き詰まって、

「これは私は大間違いをしていた」

と気が付いて、それで、ひっくり返った方が、反って本当のものになる。パウロはそれをやっていて、

「パウロという奴はもうしょうがない」

と、復活のキリストがダマスコ途上でひっくり返した。キリストは非常手段を使った。それでひっくり返された。

「それくらいのことをしないと、パウロなんていう奴はとても戻って来ない。本当のことが分からないから」

というわけです。大したものです、イエス・キリストというのは。